CHERN JYH - WEN
陳 志 文

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第 194 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 言語科学専攻
学位論文題目	**現代日本語の計量文体論的研究** **—情報伝達型の文章を中心に—**
論文審査委員	（主査） 教授 齋藤倫明　教授 小林 隆 教授 才田いずみ 助教授 大木一夫

論文内容の要旨

1. はじめに

従来、行われてきた現代日本語の研究は凡そ「文字・表記」「音声・音韻」「語彙・意味」「文法」「文章（文体）・談話」「方言」「言語行動」「敬語」などの枠組みに分けることができる。各分野において数多くの研究が発表され、著しい成果が挙げられている。ただし、「文体」研究、とくに計量的な手法による文体研究はかなり遅れているといわざるを得ない。最近の学会における研究発表を見ても、関連のものは数が非常に少ないという印象を強く受ける。

そこで、この論文ではこの歪の現象に一石を投じ、すこしでもこの分野への関心を高めることができれば、筆者の喜びはこれにすぐるものはない。本稿はまず、日本語の計量文体論の研究史を概観し、その問題点を見極める。計量文体論の先行研究としては波多野完治氏、安本美典氏、樺島忠夫氏、寿岳章子氏、水谷静夫氏らによる研究が見られる。しかし、これらの研究では文学や語彙の観点を中心に問題にされ、各ジャンルの文体に潜んでいる文体類型などの問題はぜんぜん言及されなかった。そして、さらに言えば、計量文体論における日本語と他国語との対照研究は現代日本語の研究にとって未開発の領域であると言っても過言ではない。

上述した問題点を踏まえ、本稿では、統計的な方法を利用し現代日本語の研究において最も重要視されている新聞、雑誌（週刊誌）、高校の教科書の3文体をそれぞれ適切な文体類型に分類し、さらに3者の関係についても詳しく観察することを試みる。この研究により現代日本語における大まかな文体像を表したい。また、同じく計量的な方法を用い、中国語との対照研究も試みる。このような対照研究の方

法論を新たに確立することができれば、今後、自らの研究の道を開拓していくことが可能になるのみでなく、他の研究者にも一つの研究方法として提供できるのではないかと考える。したがって、このように計量文体論における対照研究の方法論を確立することももう一つの研究目的としている。

2. 先行研究

日本では、計量文体論の研究に関しては、波多野完治・安本美典・水谷静夫・竹蓋幸生などの研究が有名である。この研究史はアンソニー・ケニィ（1996）に、次に引用するような詳細な記述が見られる。

> 波多野（1935）は、谷崎潤一郎と志賀直哉の文長（1つのセンテンス内の字数）の著しい違いに注目し、平均文長は前者は後者の倍近いことを指摘した。波多野は文長だけにとどまらず、句読点、品詞、文の種類、修飾語句などについて両作家の違いを調べ、それぞれの文章の特徴をとらえ、それらを作家の性格に結び付けようとした。安本（1965）は、日本の現代作家100名の文章（1,000字抽出）について、15の項目（直喩、声喩、色彩語、文長、会話文、句点、読点、漢字、名詞、人格語、過去止、現在止、不定止、名詞の長さ、動詞の長さ）を調査し、因子分析により文章の特徴と作家の性格を結びつけた。水谷（1983）は、統計学の理論を語彙研究に取り入れ、「計量語彙論」という分野を開拓した。竹蓋（1981）は、新聞記事、文学作品、会話文、手紙文、日本の大学生が書いた英文日記、中学校・高等学校の教科書、大学入試問題等多くの種類の現代英語やHamletから抽出した約80万語をコンピュータで分析し、種々のジャンルで使用されている語彙の客観的事実を明らかにしようとした。

以上の引用を見れば、大体現代日本語の「計量文体論的研究」の流れや推移を汲み取ることができると思われる。

3. 計量文体論研究の問題点

先行研究に示した波多野氏の研究は取り扱っている文体項目が少なく、狭い範囲での文体傾向を把握することはできるかもしれないが、全体的な文体傾向を言うには若干物足りない感がある。また、波多野氏の研究では主に文学の作品を分析の対象にしているので、語学的な研究とはやや異なっているようにも見られる。

それから、水谷静夫氏及び竹蓋幸生氏の研究は「文体」の分野というよりも、むしろ語彙研究に帰属させたほうがふさわしい。筆者が目指している「計量文体論」とは少しずれていると考えられる。先行研究において、本稿と最も関連のあるものは樺島忠夫・寿岳章子及び安本美典の考察である。中でも、筆者が特に関心を持ち、基本的に継承したいのが安本氏の研究方法である。具体的な研究方法を下述する。

また、以上に述べてきたものとは別個の問題であるが、先行研究を振り返ってみれば、この分野での対照研究は未開発の領域と言ってもいいほどいまだに進められていないことにも気がついた。そこで、できれば、一つの研究方法として提案したいと考え、第9章の試論を章立てした。

4. 本稿の目的

前節の問題点を踏まえ、本稿の目的は以下の2点にまとめることができる。

①各ジャンルの文体実態を数値で表したうえで、当該「ジャンル文体」の「文体類型」を明確にする。さらに、このような考察により、現代日本語の全体的な文体様相を浮き彫りにしたい。

②実例の分析により、「計量文体論」における中国語と日本語との対照研究の方法を１つ提示してみる。

5. 本稿の研究対象

前述したように、筆者は現代日本語における文体実態の概要と、従来漠然と「何々の文体」と称され、そのジャンルに潜んでいるとされた「文体の類型」を浮き彫りにすることを研究の目標に据えている。したがって、この目標へのアプローチが成功するかどうかは、研究対象の選定そのものにも左右されると思われる。そこで、現代日本語の文体調査に最適なものとして、筆者は最初に新聞、雑誌（週刊誌）の２つを考えている。というのは、上述した２つのジャンルは、いずれも、書き手が読み手の読解力を考慮せずにかなり自然な日本語で書いた文章であり、また販売部数も多く、大勢の人が毎日それに目を通し、知識や情報を身につけるという共通点を持っているからである。換言すれば、新聞、雑誌（週刊誌）は現代において、われわれの身近にあり、最も影響力をもたらしている代表的な読み物と言えるのではないだろうか。

ただし、それだけでは、現代日本語の文体を調査するという観点から言えば、まだ不十分である。国研（1984）に述べられているように、「高等学校進学率の増加に伴い、現今では、高等学校教育は、国民大多数の基本的な教養の場となっている。また、大学教育は、この高校教育の基盤に立って進められるものであり、とくに高校の理科と社会科は、大学における専門教育の基盤になっていると考えることが出来る」。（ｐ１）このように、高校の教科書は一般教養として国民に各分野の知識を身に付けさせるものであり、新聞及び雑誌（週刊誌）と同様に現代日本語の文体を研究する際、看過することができないジャンルの一つである。実際、国立国語研究所の語彙調査もこの３つのジャンルを中心に展開されている。したがって、本稿の研究対象を基本的に新聞、雑誌、高校の教科書の３ジャンルに絞ることに決定した。ただ、第９章の中国語と日本語との対照研究については、対照的な新聞を入手することが困難であるため、インターネットより、対照のネット記事を採集した。

上述した説明によれば、本稿の考察対象となっている「新聞」「雑誌」「高校の教科書」「ネット記事」４ジャンルの文章は現代日本語としてかなり代表的なものであると考えられよう。これらの文章では、内容並びに読者の読む態度により「娯楽性」「自主性」と「実用性」「教養性」などの区別ができるものの、基本的には共通の性質があると考えられる。すなわち、大衆の規模で読まれており、「知識や情報」を伝達する文章である。こうした性質に注目し、本稿では、この４ジャンルの文章を一括して「情報伝達型の文章」と称することにした。

6. 本稿の研究方法

本稿の研究方法では基本的には「計量文体論」の方法を採用する。つまり、計量の方法によって文体を観察する方法である。文体の実態調査は主として人工的な計量の方法にて行う。３章から８章にかけては、手作業でランダムにサンプルを取り出す方法である。そして調査で得られた数値に対して、「因子分析」の範疇に属している統計方法の「主成分分析法」をかけ、各々のジャンルの文体を適切な類型に分類することにした。要するに基本的には先行研究で触れた安本の方法を踏襲したい。

ところが、安本の方法は40年前のものであり、さらに前述の山口（1991）に「文体特性を知るための調査項目が同じである限り、安本の地図の中に、新たな一点を付け加えるに過ぎず」と示された指摘もあり、安本の方法に対し若干検討し、いままでの計量文体論の研究成果を踏まえたうえで、何らかの改変を行うことが必要となるであろう。これについて３章の研究方法に具体的に示した。

９章では、中国語と日本語との対照研究も同様に計量の方法を利用し、文体の異同を観察する。ただ、

調査法として3章から9章までの調査法と少し異なる。無作為に調査対象を抽出するのではなく、先に決めた調査対象を採集し、その全文を調査対象とする。

7. 本稿の構成

本稿第1部（第1章&第2章）では「計量文体論とは何か」と題し、「計量文体論」といったものを展開するための第1歩として、「文体」「文体の類型」などの概念や先行研究を検討した。第1章では「文体と文体類型」と題し、本稿での「文体」概念の捉え方・枠組みを示した。続く第2章では「先行研究及び本稿の立場について」と題し、現代日本語における「計量文体論」の主流である波多野完治氏、安本美典氏、樺島忠夫氏、寿岳章子氏、水谷静夫氏、竹蓋幸生氏などの研究を取り上げ、検討を試みた。

これらを受けて本稿第2部では、「現代日本語の計量文体論的研究」と題し、第1部に示したような現代日本語の「計量文体論」を考えるための枠組みに従い、計量文体論の具体的分析を行うこととなる。第2部は以下の通りである。

第3章　「新聞の各紙面に見られる文体の類型－主成分分析法による朝日新聞と読売新聞の分析から－」

第4章　「週刊誌に見られる文体の類型－主成分分析法を通して－」

第5章　「新聞と週刊誌に見られる文体の類型と関係－主成分分析法を通して－」

第6章　「高校教科書に見られる文体の類型－主成分分析法を通して－」

第7章　「新聞、週刊誌、高校教科書に見られる文体の類型と特性－主成分分析法を通して－」

第8章　「男性誌及び女性誌に見られる文体特性の相違－「論理的」と「感性的」－」

第9章　計量文体論における日中の対照研究についての一試論－日台同一事件のネット記事に見られる直接引用表現の相違－

さらに第3部（第10章）では、まとめとして現代日本語の研究における本稿の位置づけ及び主な結論について論じてみる。このように、3部によって本稿の考え方を述べる。

8. 各章の概要

先にも述べたように本稿第1部（第1章&第2章）では「計量文体論とは何か」と題し、「計量文体論」といったものを展開するための第1歩として、「文体」「文体の類型」などの概念や先行研究を検討した。具体的な分析は第2部に示した。繰り返しになるが、本稿の目的は、以下の2点に据えている。つまり、

①各ジャンルの文体実態を数値で表したうえで、当該「ジャンル文体」の「文体類型」を明確にする。さらに、このような考察により、現代日本語の全体的な文体様相を浮き彫りにしたい。

②実例の分析により、「計量文体論」における中国語と日本語との対照研究の方法を1つ提示してみる。

以上の2点の目的を目標に第2部で実際的な分析を展開した。具体的にいうと、第3章から第8章にかけては目的①に関し行われた分析であるが、第9章は主に目的②へのアプローチをするための一試論である。その成果を次のように総じて振り返ってみる。

まず、ジャンル文体の「文体類型」を明確にするため、第3章において朝日新聞と読売新聞を対象にそれぞれ8紙面を取り扱い、統計的な方法によって新聞に潜在している「文体類型」を概ね捉えられた。これについては、表6を見れば、一目瞭然であろう。

表6　各紙面の分類表

短文抒情的な情報伝達型	会話報道型	現実改善要請型	読売生活
		非現実改善要請型	読売スポーツ、朝日スポーツ、朝日生活
	非会話報道型	現実改善要請型	朝日投書、読売投書、朝日社説
		非現実改善要請型	該当なし
長文叙事的な情報伝達型	会話報道型	現実改善要請型	該当なし
		非現実改善要請型	該当なし
	非会話報道型	現実改善要請型	読売政治、朝日政治、読売社説
		非現実改善要請型	読売経済、読売社会、読売国際、朝日経済、朝日社会、朝日国際

次に、第4章において、新たに一般に認識されている週刊誌16誌を対象に同様な方法にて週刊誌の文体類型を考察した。これについて表14にまとめた。

表14　各週刊誌の分類表

短文会話の情報伝達型	体言叙事型	非修飾過去型	週刊文春、女性自身
		修飾現在型	FLASH、週刊スパ
	非体言性抒情型	非修飾過去型	週刊女性、フライデー、週刊大衆
		修飾現在型	女性セブン、アサヒ芸能
長文文章の情報伝達型	体言叙事型	非修飾過去型	サンデー毎日
		修飾現在型	週刊実話
	非体言性抒情型	非修飾過去型	読売ウイークリー、週刊新潮
		修飾現在型	週刊ポスト、週刊現代、週刊朝日

また、新聞と週刊誌との調査をする過程において、新聞における一部の紙面に示された数値はどれかの週刊誌が示した数値と非常に似通っていることに気がつき、両者の関係を改めて考察する必要があると考え、第5章において詳しく考察した。要するに、まず両者の資料を再び一緒に扱い、主成分分析法によって以下の表19のような文体類型に分類した。そして、ここから「新聞の文体特性」は「長文文章の情報伝達型」であり、「週刊誌の文体特性」は「短文会話の情報伝達型」であることが確認された。

表19　各週刊誌と各紙面との分類表（新聞紙面は斜体字で示してある）

短文会話の情報伝達型	体言叙事型	現実改善要請型	FLASH、週刊スパ、週刊文春、*朝日生活*
		非現実改善要請型	フライデー、週刊女性、女性自身、*読売スポーツ*、*朝日スポーツ*
	非体言性抒情型	現実改善要請型	週刊実話、週刊現代、週刊朝日、*読売投書*、*朝日投書*
		非現実改善要請型	女性セブン、アサヒ芸能、週刊新潮、週刊大衆、*読売生活*
長文文章の情報伝達型	体言叙事型	現実改善要請型	サンデー毎日、*朝日社説*、*朝日政治*、*朝日国際*
		非現実改善要請型	読売ウイークリー、*読売政治*、*朝日経済*
	非体言性抒情型	現実改善要請型	週刊ポスト、*読売社説*
		非現実改善要請型	*読売経済*、*読売社会*、*読売国際*、*朝日社会*

さらに観察を深めていくと、両者の関係を図4のように明確に捉えられるようになった。一言でいうと、従来われわれが認識している「新聞の文体」と「週刊誌の文体」とは互いに連続性を成していることが分かった。

従来の認識	新聞の文体		週刊誌の文体	
事　　実	新聞の文体	週刊誌よりの文体	新聞よりの文体	週刊誌の文体
該当対象	右にある３紙面以外	生活 スポーツ 投書	サンデー毎日 読売ウイークリー 週刊ポスト	左にある３誌以外

図４　新聞と週刊誌との文体関係図

具体的にいえば、新聞の「生活」「スポーツ」「投書」の３紙面には週刊誌と同じ文体特徴が見られ、週刊誌のなかにも、「サンデー毎日」「読売ウイークリー」「週刊ポスト」３誌のように「新聞の文体」と同様の文体特徴が示された。換言すれば、「新聞の文体」には実際「新聞の文体」と「週刊誌よりの文体」が存在しており、また、「週刊誌の文体」にも「週刊誌の文体」と「新聞よりの文体」との両方があることが観察された。

続く第６章では、さらに高校教科書の「文体類型」を求めた。これは表26に示すことができる。

表26　各教科書の分類表

口語調引用型	長文過去型	判断文型	倫理
		現象文型	社会
	短文現在型	判断文型	地学、生物
		現象文型	物理
文章調非引用型	長文過去型	判断文型	世界史、日本史、政治・経済
		現象文型	該当なし
	短文現在型	判断文型	地理
		現象文型	化学

表26見れば分かるように筆者は教科書10科目を７つの類型に分類した。この分類から、教科書の文体を類型化することができたのみならず、特徴的なものも捉えられるようになった。具体的に、歴史に関わる科目の文体特徴は「文章調非引用型－長文過去型－判断文型」、理科５科目の文体特徴は「短文現在型」、社会科５科目の文体特徴は「長文過去型」への傾向を示すことを客観的に確認した。

さらに高校教科書の文体類型を新聞のそれと比べ、高校教科書の文体類型は比較的に多様化していることも判明した。このことにより、歴史にかかわる科目以外に、教科書の各科目にはそれぞれ独自の文体性が強いと結論付けられるのではないだろうか。

ただ、これだけでは現代日本語における全体的な文体像を捉えるにはまだ不十分だと思われる。新聞、週刊誌、高校教科書の３者を一緒に取り上げ、総合的に観察することが必要であると判断し、第７章において再度３者の資料を取り上げ、その文体関係を考察した。この考察により、３者の文体特性や相互の関係をそれぞれ表32のように明確にした。

前述したように、第５章ではすでに「新聞の文体特性」は「長文文章の情報伝達型」であり、「週刊誌の文体特性」は「短文会話の情報伝達型」であるということを把握することができた。ただし、ここでの分析により、３者の更なる詳しい文体の特性をはっきりさせた。

表32　各週刊誌、各紙面、各科目の分類表（新聞紙面は下線付き斜体字、教科書はゴシック体で示してある）

短文会話の情報伝達型	判断過去型	現実改善要請型	週刊ポスト、FLASH、週刊現代、*朝日社説*
		非現実改善要請型	週刊女性、週刊新潮、読売ウイークリー、週刊文春、女性自身、*読売スポーツ*、*朝日スポーツ*、*朝日生活*
	非判断現在型	現実改善要請型	女性セブン、週刊スパ、週刊実話、週刊朝日、*読売投書*、*朝日投書*、*読売生活*、***倫理***
		非現実改善要請型	フライデー、アサヒ芸能、週刊大衆
長文文章の情報伝達型	判断過去型	現実改善要請型	*読売政治*、*朝日政治*、*読売国際*、*朝日国際*、*朝日社会*、*読売社説*
		非現実改善要請型	*朝日経済*、*読売社会*、サンデー毎日、***世界史***
	非判断現在型	現実改善要請型	*読売経済*、***社会***
		非現実改善要請型	***日本史*、*政治経済*、*地理*、地学、*物理*、*化学*、*生物***

すなわち、具体的には、「週刊誌の文体特性」は「短文会話の情報伝達型」であり、「新聞の文体特性」は「長文文章の情報伝達型－判断過去型」であると規定できる。また、「教科書の文体特性」では「社会科」には少々のゆれが見られるが、全体的に「長文文章の情報伝達型－非判断現在型」であると規定することができる。層別的にいえば、新聞と教科書の情報伝達型が「長文文章の情報伝達型」であり、週刊誌の情報伝達型が「短文会話の情報伝達型」であることと、新聞の文体的特徴が「判断過去型」、教科書の文体的特徴が「非判断現在型」への傾向を示すことが客観的に捉えられた。そして、3者の関係については、「週刊誌」は「新聞」「教科書」と文体特性がかなり異なっており、「新聞」と「教科書」とは文体特性が比較的に近いということが窺えた。

これのみではなく、現代日本語において、とりわけ情報伝達型のジャンルに属する文章では、概して表32に示した3成分によって分類できるという傾向性も捉えられた。少なくとも、第3章以来の研究結果を併せて見れば、現代日本語における情報伝達型の文章は文体的にまず＜短文会話（口語）の情報伝達型－長文文章の情報伝達型＞の対立により二大別されていると言えそうである。

また、筆者が4章において週刊誌に対して行なった調査結果によると、いわゆる女性誌である「女性自身」「週刊女性」「女性セブン」などの3誌に似ているような文体特徴がみられた。中村（1993）にも「文章を読む相手をどう意識するかに応じて働きかけの姿勢に差が生じ、それが言語表現の面に反映する。」という指摘がある。したがって「男性のための読み物」と「女性のための読み物」にも文体差異が存在しているのではないかと考え、続いて第8章において、一般に「女性誌」「男性誌」とされるものを6誌ずつ選出し、その文体差を調査することにした。この結果を表41で表すことができる。表41の考察から、女性誌の文体特性を「会話調引用型－非論理抒情型」に、男性誌の特性を「文章調非引用型－論理叙事型」というように結論付けられた。

表41　男性誌と女性誌との分類表（女性誌はゴシック体で示してある）

会話調引用型	長文非体言型	論理叙事型	**婦人公論**
		非論理抒情型	**Precious**
	短文体言型	論理叙事型	Dig up
		非論理抒情型	**an・an、日経WOMAN、MAPLE**
文章調非引用型	長文非体言型	論理叙事型	Goods Press、MEN'S EX、PLAYBOY
		非論理抒情型	**STORY**
	短文体言型	論理叙事型	Begin
		非論理抒情型	MEN'S CLUB

以上に述べたように、第3章から第8章にかけての分析により現代日本語において最も重要視されている研究対象である「新聞」「週刊誌」「高校教科書」3ジャンルの「文体類型」や文体特性をそれぞれ明確にした。しかも、各ジャンルにおいて文体に関わる重要な数値も数多く残すことができた。これだけでなく、第7章の分析により現代日本語における全体的な文体像をある程度はっきりさせることもできた。要約すれば以下の2点にまとめられる。

①現代日本語において、とりわけ情報伝達型のジャンルに属する文章では、概して表32に示した3成分によって分類できるという傾向性が現われている。

②少なくとも現代日本語における情報伝達型の文章は文体的にまず<短文会話（口語）の情報伝達型－長文文章の情報伝達型>の対立により二大別されていると言えそうである。

続く第9章は目的②へアプローチするための一試論である。この章では、同一事件に関する日台の記事をそれぞれインターネットより採集し、「直接引用」という文体項目に注目し、日本語と中国語との文体差を考察した。その結果、まず、「直接引用」の使用状況という観点から考察すると、表44に示されたように中国語のネット記事の文体特性は「発話引用型」であり、日本語の記事の文体特性は「情報源明示引用型」であることが判明した。

表44　日台「発話引用」と「情報源明示引用」の比較

国別	発話引用	情報源明示引用
日　本	54	37
台　湾	161	17

しかも、日台の記者たちは引用動詞を選択するに際しては、図6のように出発点に相違が認められることも分かった。また、その相違については「客観報道への考えのずれ」と「免責考慮の違い」との2要因によるものと考えられる。

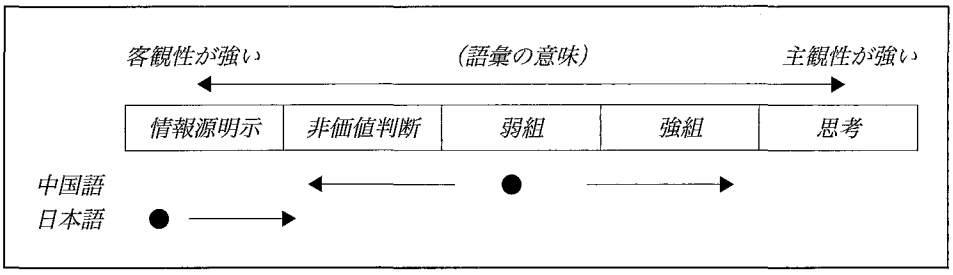

図6　日台の記者が引用動詞を選ぶ出発点の相違

このように、日本語と中国語に関する文体の対照研究を行う際、多項目の考察は困難であるとしても、当該ジャンルにおいて最も重要視されている文体項目を1つに絞り比較すれば、両者の異同を顕著に指摘できることを示唆した。こういった実際的な試論により、対照研究の1つの方法として確立されたと言えよう。

最後に第3部の第10章では現代日本語の研究における本稿の位置づけや本稿で主に得られている結論を論じた。

ちなみに最後に本稿の隣接分野として最近言語学の最先端研究と言われるほど大いに注目されている「コーパス言語学」との関係について考えてみる。「コーパス言語学」とは聴きなれない言葉であるが、しかし近年コンピュータを利用したコーパス言語学研究はかなり注目の的となっている。この方法を使用し、『源氏物語』のような長編の作品や、「個人文体」を解明するためある作家の全作品をすべて対象

とした分析が可能になりつつある。ところが、所要された労力や設備をいまだに個人ベースの研究では整えるのが容易なことではないようであり、また多項目にわたって調査する際、認定のソフトも完備されているとは言いがたい。一方、「新聞」「雑誌」「教科書」のような母集団が膨大で無限に近い「ジャンル文体」の研究では、本稿のような手作業でランダムにサンプルを取り出して分析する（標本調査）方法が文体の傾向性を捉える手段として現在でも欠かせない。ただ、現代日本語における全体的な文体様相を捉えるためには考察対象をさらに他ジャンルに拡大すべきであろうが、今後の課題としたい。

参考文献

波多野完治（1935）『文章心理学』三省堂
安本美典（1965）『文章心理学入門』誠信書房
竹蓋幸生（1981）『コンピューターの見た現代英語』エデユカ出版
水谷静夫（1983）『朝倉日本語新講座２　語彙』朝倉書店
国立国語研究所（1984）『高校教科書の語彙調査Ⅱ』秀英出版
山口美仲（1991）「第Ⅱ編　各国の文体論－回顧と展望　1.日本」『文体論の世界』日本文体論学会　三省堂
中村　明（1993）『日本語の文体　文芸作品の表現をめぐって』岩波セミナーブックス
アンソニー・ケニィ（1996）吉岡健一訳『文章の計量』南雲堂

論文審査結果の要旨

本論文は、大きく「第１部　計量文体論とはなにか」(全２章)、「第２部　現代日本語の計量文体論的研究」(全７章)、「第３部　まとめ－現代日本語の研究における本稿の位置づけ並びに意義－」(全１章)、の３部10章から成る。

「第１章　文体と文体類型」では、「文体」とは何かということについて論じ、本論では、文体を「個人文体」と「ジャンル文体」とに大別したうえで後者を対象とすること、文体をいくつかの文体的特徴の束である「文体類型」という形で捉えること、の２点を基本的な立場として提示している。

「第２章　先行研究及び本稿の立場について」では、本論の具体的な方法論である「計量文体論」の先行研究を略述し、その問題点を指摘するとともに、それを克服するために本論では分析手法として因子分析法を援用すると述べたうえで、本論の二つの目的、⑴現代日本語のジャンル文体の様相を明らかにすること、⑵計量文体論による日本語と中国語との対照研究の試みを実践すること、を提示している。

「第３章　新聞の各紙面に見られる文体の類型」では、朝日新聞と読売新聞の各８紙面（計16紙面）を対象とし、25個の調査項目を独自に設定し、その調査結果に対して主成分分析を行なっている。その結果、＜短文抒情的な情報伝達－長文叙事的な情報伝達＞成分、＜会話報道－非会話報道＞成分、＜現実改善要請－非現実改善要請＞成分、の３成分を抽出しうることを示し、それに基づいて16紙面を５つに分類するとともに、各紙面の文体類型を明らかにしている。

「第４章　週刊誌に見られる文体の類型」では、市販の週刊誌16誌を対象とし、25個の調査項目による調査結果に対して主成分分析を行ない、＜短文会話の情報伝達－長文文章の情報伝達＞成分、＜体言叙事－非体言性抒情＞成分、＜非修飾過去－修飾現在＞成分、の３成分を抽出することによって、16誌を８つに分類するとともに、それぞれの週刊誌の文体類型を明らかにしている。

「第５章　新聞と週刊誌に見られる文体の類型と関係」では、第３・４章の結果を受け、新聞と週刊誌とを総合的に取り扱い、これまでと同様の手法で分析を行なっている。その結果、＜短文会話の情報伝達－長文文章の情報伝達＞成分、＜体言叙事－非体言性抒情＞成分、＜現実改善要請－非現実改善要請＞成分、の３成分が新たに抽出されうること、大きく、新聞の文体特性は「長文文章の情報伝達型」であり週刊誌の文体特性は「短文会話の情報伝達型」であること、それぞれのジャンルの中にもう一方よりの文体を有するものがあること、を明らかにしている。

「第６章　高校教科書に見られる文体の類型」では、高校の理科と社会科の教科書各５種類（計10種類）を対象とし、25個の調査項目による調査結果に対して主成分分析を行ない、＜口語調引用－文章調非引用＞成分、＜長文過去－短文現在＞成分、＜判断文－現象文＞成分、の３成分を抽出することによって、10種類の教科書を８つに分類するとともに、それぞれの教科書の文体類型を明らかにしている。

「第７章　新聞と週刊誌と高校教科書に見られる文体の類型と特性」では、第３・４・５・６章の結果を受け、新聞と週刊誌と高校教科書とを総合的に取り扱い、これまでと同様の手法で分析を行なっている。その結果、＜短文会話の情報伝達－長文文章の情報伝達＞成分、＜判断過去－非判断現在＞成分、＜現実改善要請－非現実改善要請＞成分、の３成分が新たに抽出されうること、各ジャンルの文章は独自の枠組みの中に収束すること、週刊誌は新聞・教科書と文体特性が極めて異なっており、新聞と教科書とは文体特性が比較的近いこと、を明らかにしている。

「第８章　男性誌と女性誌に見られる文体特性の相違」では、第４章を受け、さらに男性週刊誌６誌、女性週刊誌６誌を新たに対象にし、これまでと同様の分析手法で、対象読者への意識が文体にどのように反映されているかを調査、分析している。その結果、大きく、男性誌の文体特性は「文章調非引用型－論理叙事型」であり、女性誌の文体特性は「会話調引用型－非論理抒情型」であることを明らかにしている。

「第９章　計量文体論における日中の対照研究についての一試論」では、インターネットより対応する日本語と中国語との記事各45編（計90編）を抽出し、それぞれの文体的特徴を比較するために、報道記事に特有の引用表現を取り上げ調査、分析している。その結果、日本語の記事には「情報源明示引用」、中国語の記事には個人の話を直接引用する「発話引用」が多いこと、日本語の記事には強い主張を含んだ「引用動詞」の使用が控えられていること、を明らかにしている。

「第10章　ジャンル文体の『文体類型』と日中両言語における文体の相違」は、本論文におけるこれまでの分析のまとめである。

本論文は、これまでの文体研究を踏まえつつ、従来、個別的に研究されて来たジャンル文体の特徴を、計量文体論の手法、特に主成分分析法を駆使し、文体類型の追究という形で、総合的、かつ大規模に調査・分析したものである。統計的に処理された客観的な数値に基づき論を展開しているところに大きな特長が見られる一方、単なる数値解釈にとどまらず、文体という対象が有する微妙な揺れや連続性の問題にも充分な配慮が見られる点は特筆に値する。さらに、日本語と中国語との文体に関する対照研究の実践も、意欲的な試みとして高く評価されよう。そういう点で、本論は今後の語学的な文体研究に寄与するところが少なくない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに充分な資格を有するものと認められる。